雜纂

獨逸史學の二大百年記念（下）

文學博士　坂口昂

私は轉じて、本年に於ける他の百年記念を追憶せう、吾々は之をMGに相雙べる、之を缺くことが出來ない。この記念はMGの編輯主任と正さしく同年齡の一青年史家にして當時一地方中學教師たる人の業績に向つて捧げらるべきである。それは他でない、レオポルド・ランケの「羅馬風ゲルマニ風諸民族史」である。

ランケについては、曾て「ロマンチック時代の一青年史家の生立」(三)と題して發表したから、茲にはこの今日記念すべき對象につきて極めて必要な點だけを摘んで述べる。レオポルドは中央ドイツの敬虔な新教家庭から出で、實にルテルと同じくチユリンゲルであつた。晩年の告白によれば、彼の青年時代に最大いな感化を受けた三人の先輩を指摘しフィヒテとニーブールと相並べてこのドイツの宗教改革者が擧げられてゐる。ニーブールの文獻的批判的方法がランケニ及ぼした影響は今更喋々を要しない。フィヒテの哲學的觀照のランケに對する關係は曾て論じたことがあるから(四)說かない。こゝでは主としてルテルとの交渉に重きをおかう。

一八一七年ワルトブルグ祭の折、當時二十一歲

のライプチヒ大學生として、ランケはルテルの書いたものを渉り讀み、坊間の所傳の薄弱なのに發憤し、自分が一つその眞の歷史を究明せうと思ひ立ち、實に之が著手を試みたほどであつた。その成就しないうちに、翌年フランクフルト・アン・デル・オーデルの中學に赴任することになつた。スタイン男爵の史料編纂協會が上に見た如く、マイン河上のフランクフルト市で創立されたのに相對して、ランケの記念さるべき業績は北ドイツの同じ名の田舍市で創始さるべきであつた。

彼はこゝに奉職滯在すること、一八一八年秋から一八二五年春まで、六年半、この間に彼の文獻的歷史的勉學は大いに進步して、滿六年の秋には既に彼の記念的處女作を公にし得た。これは全くこの青年史家の眞理と普遍とを探求する敬虔さ眞面目さの產物であつて、フィヒテ及びニーブールの感化の外に彼の生ひ立ちを形作るルテル的信仰と密接な關係を有つてゐることを吾々は度外視し得ない。それは、この間に自分の愛弟で既に牧師の職務を有つてゐるハインリヒと往復した幾多の彼の書簡に於て、遺憾なく現はれてゐる。（五）彼はフランクフルトに行つて一年半經つた時、次のやうに書いてゐる。「あらゆる歷史のうちに神が住み神が生き、神が認めらるべきである。人間の行爲の一つ〳〵が悉く神のしるしである。おの〳〵の瞬間が一つ〳〵神の御名を說き示さないものはない、されど自分は思ふそれが最もよく現はれてゐるのは大いなる歷史の相結合する所に在る。……進め！如何に成りゆくとも、只だ〳〵、吾々の立場で、この聖き神の文字（ヒローグリフ）を讀み解くことに向つてのみ進みゆけ。かくの如くして吾々は神に仕へる、祭司（プリースト）であつても、敎師であつてもさうだ」とある。ランケはつまり敬虔と史學とを相並べ相結びて一つに考へてゐたらしい。それから五年經つ

て處女作新に成り、伯林へ榮轉する少し前に、再びいふ「私が求めるのは確かに眞理である、空想でない、私は全力をつくして眞理を求める、私はたしかに神の到るところに存在しますを信じ、この神をは宛らわが手を以て明かに把みうると思ふ。目下の自分の心持は、自分自ら千たび誓ひて、わが全生涯を神に對する敬虔と史學とに傾倒するにある。……私の一切のものは生きに生くる永久の神を認識するため、吾々の國民及び世界の神を認識するために献げられて必ず成功するであらう。……ヨハンネス・ミュルラは曾て、天上には遂に神の文書庫（Archiv）が存在しなければならぬといつた、が、しかしこの地上にも亦たさうだ。私は今近代史を研究する。この未だ開拓されない荒野を打つて、その底に確かに存在する泉の水を地上に流れ出でしめるために、私は史學のモーゼとなりたいものだ」といつてゐる。故に、他の歴史家に比して、同じ認識の願望といつても、ランケのあこがれは全く違ふ、即ち宗教的色彩を帶びてゐることが著しい差別である。しかしてこの宗教的動念は世界史において神又は神的のものを認識するに向けられてゐる。しかし、これはランケの史學を行るところの動力であつて、彼の史學の作業の本質ではない。彼の宗教性は上に述べた如く頗る深大であつたけれども、彼の學問の仕方にまで侵入してゐない。即ち、彼の史料の取扱ひ方を左右するまでには至つてゐない。彼の敬虔さはいかにも至純至眞なものであつて、如何なる教會的定說的（キルヒリヒ・ドグマーチッシ）なる束縛からは、何等の支配を受けなかつた。而して同じ動念は彼を驅つていつも何物か普遍的なものを追求せしめ、如何なる單個なるものといへども、之を普遍的なるものの一つの現はれとして、全體の一斷面として、宛ら神そのものゝ現はれと同樣に、之を尊重して、決してお

ろそかに取扱はなかつた。彼には事物が單なる個體なるが故に、全體に隷屬する第二次のものとは考へられなかつた。若しくば、彼には、一つの單個なるものが、他の單個なるものゝ爲めに、奴僕の如くに利用されるものとして存在するとは考へられなかつた。すべての單個は、一つ〳〵、普遍的なるもの、否な寧ろ神的なるものに直面親炙し之を若し或る永久なるものゝ眼から見たならば、すべて同等の位置と價値を有するであらうと考へられた。この見地からしてランケは、歷史の長い連續の流れ全體のうちに普遍が存在すと考へた。之と同じく、彼は歷史生活の一斷面に於ても、同一の普遍なる精神的原動力が、そこに現はれてゐると見た、卽ち國家でも、文化でも、文學でも、藝術でも、宗敎でも皆な同一の普遍なるものが自ら現はれた斷面と考へられた。ランケはかくて普遍史に渦仰し、その把み方について次の如く書いた。人生の發展の道行、世界史のイデーを探求するのは、私に取りて何よりの愉快(ライツ)だ、未だ曾て之より美はしい歷史はなかつた。然して之を認識する仕方如何、茲に相異なる二つの仕方がある。第一哲學者の頭腦の中で思ひついたスペクラチーフな考卽ち一定の系統を傳うて追究すること、ただしは第二、吾々に生れついた性情の發露のいつでも本源となつてゐる人生の相貌(ツーステンド)を對象として之を攻究することである。　(das Verfolgen spekulativer Gedanken, oder das Eingreifen der Zustände der Menschheit.) これら二つの何れかがより多くの眞理を有するか、いづれかが吾々を導いて本質的存在の認識により近く接せしめるか。ランケはかく自ら問ひて自ら答ふらく、自分はこの第二の方法思ふ、何せならば、この方が誤謬に陷ることより取らうと少からうから。成程吾々の史學は全く斷れ〴〵の狀態にあつて、暗黑なところが多い、

甚しき場合には、全く分らない有様にあるのは、殘念ながら事實だ。而も吾々は既に或る若干の知識を確立し得た、その他の未だ分らないものでも、之を研究すれば、眞の姿に恢復されうる。かく吾々の方法によつて、歴史生活の全體なるものが、その完全なる眞理に於て掴み出されるに至るだらうといつてゐる。

かくの如き宗教的（レリギエーゼ）、しかし教會的（ヒエリヒ）でない眞面目な道念に基ゐた觀照と文獻的批評的方法とによつて、當年二十九歳の一田舍中學教師が作り上げて、ドイツの史學界に送り出したのが、即ち「羅馬風ゲルマニ風諸民族史」である。このものは啻に百年後の今日ばかりでない、今後長く記念すべき二個の永久的價値を具備してゐる。即ち、その一つはその世界史的把捉である。本書の緒言にいふ、「是等諸國民の歴史はあらゆる關係に於て相連絡してゐる、これをその統一（アインハイト）の姿に於て把まうと試みたのが本書である。世人は過去を裁判し、未來に役に立つやう同時代の人々を教える役目を史學に與へてゐる。そんな高い役目は本書の敢て取らざる所、本書は、只だ、元來それが如何であつたか、を示さうと欲するばかりである」と。さればこの書は從來何人も試みなかつた西洋近代史の舞臺の統一（アインハイト）即ち世界史的性質を確立し、その模範を示したものである。諸君試みに本書の只だ序論十六頁だけを讀破したならば、蓋し當時非常の卓見であつたことにつきて思ひ少くも半ばに及ぶであらう。第二の價値は、本書の史料が當時の覺書、日記、書簡、使節の報告、直接見聞、著の根本談話、その他之にも類するのであつて、これらを文獻的批判的方法によりて取扱ひて利用した點にある。殊にこの方法適用の結果をば、第二卷として「近代の歴史を書きたる人たちの批判のために」と題して同年同時に出版したの

にある。その劈頭には、從來世人がこの時代の權威としたギツチヤルヂニのイタリア史は俎上に上ぼされてゐる。世人がギツチヤルヂニを尊重したのは、寧ろ其内に幾多の政治上格言、その他の敎訓を含んでゐるに在つたからで、彼等は、それが果して根本史料として信頼すべきや否やを問はなかつた。この後の點は正しくランケが始めて攻究批判して當時及び後世をして始めて向ふ所を知らしめたのである。尙は同書に於て、その他、ルイ十一世及びチヤールス八世時代を覺書きしてゐる有名なコミーヌも、君主論その他で八釜しいマキヤウリも亦た同一標準の下に正しく批判解剖されてゐる。

つまり、ランケの處女作は史學史上に於て一個のエポックを劃するものである。この書出づるや早くも伯林の學界を動かし、此青年史家を中央に呼び寄せて大成せしむる事になつた。現にランケが之を文部省の某高等官吏に贈つたら、一週間内に非常に鄭重な禮狀到來し、ランケを以て歷史の恢復者と期待し、機會のあり次第に大臣に推薦して歷史の敎授に任用せしめやう、それから歷史の古文書が欲しいならば本省は之が提供に吝かでないとさへあつた。果して翌年春ランケは伯林大學に榮轉せしめられた。歷史の古文書といふのは、實はランケが未だ利用してなかつたものだ。彼が田舍中學の圖書館で接し得たのは、すべて只だ印刷された書籍文書ばかりであつた。彼の理想とする世界史大成には、ウエネチヤ外交官の報告書を始めとし、根本古文書は絕對に必要であつた。斯の如き古文書につきては、ランケは伯林に於て始めて其一端に接し、ついで一八二七年ウィーン及びイタリアに向つて研究旅行に及びて一層豐富に見參されることになつた。ランケは當時古文書發見のコロンブスを以て自ら任じた位であつた。

さて、ランケの感化が學界に對してその威力を發揮したのは、上述の南方旅行より歸任後數十年間伯林に於て受持つた講義及び演習であつた。當時の學生のうちから幾多の堪能なる若き歴史家が輩出した。彼等の或者はMGHの編纂に參加し、最初はペルツ及びベーメルを助け、後には斯業の中心となつた。彼等の他の者は國家の政治運動の教養に參與して大功を立てた。しかしながら、かくの如き偉大なる感化力の根本精神は既に一八二四年出版の處女作に體現してゐるが故に、吾々は、そこに、之を壯んに記念すべき十分の理由を認めなければならぬ。

序にランケの政治癖といふ世説に對して辯じておかう。ランケを以て一概に政治史家であると貶斥するのは、大體に於て誣妄である。それは、上に述べたランケの弟子のうちの一部分、例へばジユベルやトライチケやの如きが盛んに現實界に關係したといふ事實から空想して起つた謬説である。是等はビスマルクの時代に榮えた歴史家だ、その時代の政治的必要に應じて政治的歴史を書いた。この時代には現實界に對して比較的淡如たる老ランケその人は是等の新進の現實派からは却つて疎んぜられて不人望に陷つた位であつた。故に十九世紀の半ばに出たランケ派のうちに政治史に偏したものが可なり多いといふのは事實だ。けれども學祖ランケが直ちにそれであつたと一概に論斷して了ふのは、甚だ輕率である。試みに彼の著書全集五十四卷と世界史九卷とを取つて、よく讀みよく味はつて見るがよい。殊に「南方ヨーロツパの君主及び人民」やセルヴィア史や、イタリアの詩歌藝術論を熟讀してみよ、そこに所謂文化史的要素が豐富に藏されてゐるを發見するであらう。思ふに、ランケを以て直ちに政治史家と見做す人は、實は未だランケを讀まざるものであら

う。十九世紀後半より二十世紀へかけて、政治史に對する反動として所謂文化史派、又は經濟史派ともいふべき新しき試みが現はれたのは、よしやそれ〴〵相應な存立理由を有つにしても、いづれも不十分であり、缺陷があり、剩へそれらの系統的組立は大戰役の大變動によつて現實に破壞された趣がある。さてこそ近時却て再びランケに反るべしとの聲が盛となり、有力となつた。猶ほ哲學の發展が窮してカントに反れ、ローマンチックに反れといふが如きである。畢竟ランケのドイツ史學に於けるは、カントの哲學に於ける、ゲーテの藝術文學に於けると同じくドイツ知識の巨星として永久に學海の指導者たるべきであらう。

私の論述は終に近いた。

以上述べ來つた如く、本年一九二四年はドイツ史學の二大百年記念の年であつて、吾々は之に敬虔なる思を捧げて自ら反省の料としたい。しかし吾々はMGH及びランケを以て永久に亙りて完全無缺にして、之に一指だも觸るべからずとは、私は毛頭考へない。昔はフレクザンダ大王の尙ほ太子たりし時、父フィリップの百戰百勝の報を聞き、腕を撫して歎じて曰く父はわれに何等の攻城野戰の功名を殘さざるに至るなきやと。吾が史家は必ずしもアレキザンダの嘆を再びするを要しない。歷史は觀る者の立場によりて、又は時代の觀照によりて、それ相應に書き改められてよろしい。否、なくてはならぬ。同じ一つの富士山を描くに、いづれの方角からでも、或は飛行機の上からでもよろしい、それでも、苟も適切なる見地と方法とが取られさへすれば、出來上つた影像が富士山といふ眞理であることは變らない。況んや新時代の事件事變は日々に簇生しつゝあり、又た古き時代に對しても新しい史料がしば〴〵發見されるをや。又た殊に況んや史學起りて年尙ほ淺く、そ

の適用まだ十分ならざる日本、支那、その他の東洋に關してをや。この方面に於ては、新に第二のMGHや、新に第二のランケやの出現が當然に願望されるべきことではなからうか。

三　史　林　大正九年一、四月號
四　藝　文　大正三年一月號
五　ランケ全集　第五十四卷

歐米の古文書館（中の一）

文學博士　三浦周行

五　古文書の保存

古文書館に於ける古文書保存の狀況を知らうとするには一應古文書館の建築についての概念を得て置くを便宜とする。古文書館の建物はこれを大別して在來の古建築物を流用したものと其固有の建築物との二つとすることが出來やう。前者が伊太利、佛蘭西の如き、文化の淵源の古い國々に多く存するに反して、後者が其他の邦國に見らるゝのは面白い對照である。私の歴訪した歐米の古文書館の中では、先づローマのヴチカノ法王廳の古文書館は、彼グレゴリオ曆の創製者たる法王Gregorio十三世の觀象臺等を含んだ古建築を利用して居る。エネチアの國立古文書館はS. Maria Gloriosa dei Frariといふエネチア切つての宏大壯麗なるゴシック式のフラシスコ派教會堂の隣にあるが、これももとはS. Nicoletto della Latturgaといふ教會堂と舊僧院とであつた。パリでは別して重なる公共的建造物に王朝時代の古建築の利用